



■兵庫コレクティブタウン住宅の開発設計

(1996年、兵庫県)

阪神・淡路大震災の復興に向けた住宅供給の一環として、兵庫県では高齢被災者の生活再建のためにコミュニティ形成を重視したコレクティブハウジング(協同居住型集合住宅)プロジェクトが企画された。我国で初めてのコレクティブハウジングの実現に向けた計画・設計にあたり、日本の生活様式等に対応した日本型コレクティブ居住のあり方、高齢者のみの生活への安心感づくり、災害復興住宅としての事業の緊急性、公平性が重視される公営住宅での管理のあり方といった様々な課題に対し、住宅計画として原点からの取り組みを行った。共生をめざした新たな住まい方の提案＝安心・いきいき・なかよし居住の実現を基本目標に、「協同化することによって得られる豊かな生活空間」、「居住者が共に支え合う安心生活」、「地域とのつながりのある生活」という3つのコンセプトを設定し、神戸市を中心とした具体の団地を通して実践的に検討を行った。ハード面での計画・設計とともに不可欠なソフト面についても、募集・入居や管理運営のシステム、対高齢者居住支援等に関する方策を災害公営住宅のシステムに適合させ運用するため

の提案も行った。さらに、この新しい住まい方の民間住宅も含めた波及・普及を視野に入れた施策展開の方向性と支援システムを検討・立案した。公営住宅では初めてのグループ募集も開始されることとなったが、今後、入居・生活展開にあたって支援も含めた継続的な取り組みが成功の要件と考えている。神戸市の既成市街地を中心とした最初の5団地(東部新都心・脇浜住宅、南本町住宅、片山住宅、岩屋北町住宅、大倉山住宅)は「高齢者コレクティブハウジング」として計画したが、引続き取組んだ尼崎市内の金楽寺住宅は「多世代型コレクティブハウジング」として一般化した計画になった(岩屋北町住宅、大倉山住宅以外は実施設計まで担当)。住戸住棟計画としては、当社が一貫して取組んできた共同化のメリットの追求というテーマを従来の集合住宅にない新しい地平の上で考えるものであり、ここでの実験は今後の共同住宅計画にとって大きな示唆を与えるものと考えている。



各団地の計画においては、各住戸から面積を出し合うことで、最も条件のよい場所に協同生活の場としての共用空間を設けること、住戸は小さいながらも自立した生活が可能な住機能を確保するといった基本的な住戸住棟計画の方針は統一しながら、各々規模・開発形態の異なる団地に応じた多様な協同生活のグループ構成を採用した。低いランニングコストで快適な生活が期待できるパッシブソーラーシステムや、一部団地では全電化の採用も行っている。

東部新都心・脇浜住宅(1996年～、住都公団)

震災復興のリーディングプロジェクトである東部新都心の脇浜海岸通団地の県営ブロック内に位置する。規模が大きいため2層で1グループとし、上下階は大きな吹抜空間と階段によって視覚的つながりと利用上のつながりを確保した。

中央部のコレクティブ共用空間を住戸が取り囲むホール型の採用により一体感の高い構成をとった。履替は全体戸数が大きいため各階エレベーターロビー部分で行い分散させている(RC造6階建44戸)。

